

## 資料 1

金銅熱田五社明神本地懸仏（こんどうあつたごしゃみょうじんほんじかけぼとけ）

### <概要>

「金銅熱田五社明神本地懸仏」は、銅と鍍銀<sup>1</sup>の鏡板<sup>かがみいた</sup>の表面に、銅と鍍金からなる半肉彫<sup>はんにくぼ</sup>り<sup>2</sup>の大日如来ほかの五尊像を貼り付けた懸仏である。鏡板表の中央に「亀背五社／本宮本地」、同裏面に「熱田亀背五社明神」と墨書があり、五尊が熱田宮五社の祭神の本地仏であることを示している。中央の大日如来のほか、阿弥陀如来、釈迦如来、薬師如来、宝生如来が置かれている。

尊像の肉取りは薄肉<sup>うすにく</sup>で、早期の懸仏の特色をよく示しており、体軀や衣文<sup>えもん</sup>がやや簡略に表現され目尻の下がる穏やかな容貌は、藤原期の木彫仏の雰囲気をよく残している。

境内の八大神社は大興寺鎮守とされ、熱田五社明神と八幡三社を祀っている。本懸仏と両界大日如来・聖観音菩薩懸仏が当社の御神体であったと伝えられ、本品の製作時期は鎌倉時代前期、12世紀末から13世紀前半であると考えられる。

本品は、全国的にも類品の少ない早い時期の懸仏の作品であるのみならず、熱田五社の本地仏構成を知ることができる最古の作例としてもきわめて貴重である。

<sup>1</sup> 鍍銀：銀メッキのこと。

<sup>2</sup> 半肉彫り：浮き彫りの一種で、文様の盛り上がりが高肉彫りと薄肉彫りの中間のもの。



金銅熱田五社明神本地懸仏（愛知県教育委員会提供）